

コンゴブラザビル鼓笛隊の教会側の責任者は、教会「住み込み青年」として従事していたマサンバ・アンドレ氏だった。彼は子供時代から教会に出入りしていて、当時の日本人教会長の子弟とも仲良く遊んでいたという。彼にとって教会は生活の一部となっていた。鼓笛隊には発足当時（1977年）から参加。すでに15歳ではあったが、会長の交代によって幼なじみの日本人も去ってしまった教会において、この鼓笛活動は、新たな活動の場、彼にとっての「居場所」となり、やがて彼が、住み込み青年、ようぼく、さらには教会役員へとつながっていくための大きなきっかけになっていったと言える。そして、このマサンバ氏の教会とのつながりから、コンゴにおける鼓笛活動の意義や、さまざまな問題点を読み取ることができる。



私が鼓笛隊に関わっていた時、日頃の運営、楽器等の物資の管理、また音楽等の技術面の指導に関しては私の担当だったが、鼓笛隊として教会内外での演奏機会の際には、彼が実質的な責任者だった。演奏や行進が行われる時は、彼がドラムメジャーを勤めた。特にコンゴの子供たちに鼓笛隊として規律も守らせるためには、現地のやり方が有効で、また子供相手なので現地の言葉が不可欠だったので、鼓笛活動は彼との二人三脚の中で続けられていった。

彼が教会に出入りするようになったのは、彼の親が天理教だったというわけではない。むしろ、家族は他宗教の信者であり、彼が天理教に出入りすることを快く思っていなかったところもあったようだ。こうした「信仰一世」の子供たちが多いのが、コンゴの鼓笛隊の特徴でもある。日本のように、信者の親たちに連れてこられて鼓笛活動に参加するというような例はむしろ稀だった。ただ、子供たち自身の意志で教会の活動に参加しているという状況では、家族の協力・理解が得られにくい。兄や姉が弟や妹の世話をするのが当たり前の社会で、練習に幼い子をおんぶして来る子や、家事の手伝いで練習に来られなかったり、また家の都合で親戚宅に預けられたり、遠くに引っ越ししたりすることによって、途中で止めざるを得ないような子供も少なくはなかった。

子供たちの多くが親からの信仰を受け継いだという形ではなく、自らの意志で教会の活動に参加するという事実は、視点を変えるなら、世代を通じて教えを伝達する「縦の伝道」でもある鼓笛活動が、コンゴでは「横の伝道」の役割をも担っていると言える。実際、マサンバ氏自身も、そうした横の伝道を兼ねた縦の伝道の中で信仰を深めたのである。つまり、コンゴにおける鼓笛活動は、新たな信仰者「候補者」を子供時代から育てることができる活動だと位置づけられる。子供時代から教会に通い、分からないながらも教会でのおつとめに参加し、「みかぐらうた」を聞き、黒いハッピーやコンゴ文化にはないおつとめ着や教服、鳴り物に触れていく中で、それは異文化ではなく、むしろ「育った環境」となっていくのではないだろうか。

鼓笛を始めたのがまだ10代の子供たちであっても、鼓笛活動に続く教会の活動が存在しなかったため、いつまでも鼓笛を続けることになってしまう。マサンバ氏も始めた頃はすでに15歳

だった。そこから10年近く鼓笛活動に「現役隊員」として関わっていたことになる。私が鼓笛隊を指導するようになった時に、30歳になろうかという隊員たちがいたことにはそうした背景がある。せつかく小さい頃から鼓笛隊を通じて教会に通っていても、鼓笛活動が終了すると同時に教会からも足が遠のくのである。子供たちにとって、鼓笛は教会へ通う大きな楽しみだが、先に述べたように、そこに親や家族のサポートのない場合は、それ以降に教会につながる「理由」がなくなってしまうのである。

このように「ポスト鼓笛活動」が問題となっていく一方で、鼓笛隊の演奏機会が多くなるにつれ、入隊希望者も増えた。人数が増えると楽器やユニホームも足りなくなる。ところがコンゴには楽器店すらなく、楽器の補充や修理のための部品の調達もできない。また、マサンバ氏と二人だけでは対応しきれなくなり、指導者の育成が課題となっていく。当時、子供の活動としての鼓笛隊と20歳にもなろうとする「大人」隊員をどのように扱っていくかが大きな問題だった。そこで17歳までを隊員の上限とし、それ以上は指導者として鼓笛に関わっていくという形をとったが、不評であった。なぜなら、みんな隊員として出演したいからだ。実際、鼓笛隊の「定年」を迎えて教会に来なくなった者も少なくない。中には仕事の都合で来なくなった者もいるが、教会での「居場所」を失って去った者も多かった。マサンバ氏が指導員として鼓笛活動を続けられたのは、教会内に「住み込み青年」という「居場所」があったからだと言える。

こうした中、鼓笛隊の卒業者で構成される別の音楽隊の結成の機運が高まった。その声に応じてトランペットが数本準備されたが、実質的な活動に至らなかった。また、子供たちを教会へつなげるために、鼓笛活動だけでなく、教理問答のような教化育成プログラムを考えようとした。マサンバ氏も子供のために基本的教理やおてふり等を随時教えていたが、当時の教会にはそうしたことをシステム化するような体制がなく、常に単発的なもので終わっていた。結果的に言えば、当時の鼓笛活動は「Tenrikyô」の名前を広げることに貢献したが、子供たちを信仰へ誘うための教会活動としては機能しきれていなかった。

ところで、このマサンバ氏が今年6月30日、突然の病に倒れ、亡くなった。48歳だった。40年以上に亘る彼の信仰歴の中で、鼓笛隊は大きな比重を占めていたに違いない。昨今、教会では少年会が正式に発足し、また2年余りに及ぶおぢばの研修を終えた鼓笛指導員も誕生した。体制が整う中で、マサンバ氏の鼓笛隊の経験がさらに活かされるはずだった。誠に残念なことである。ただ、発足当時から鼓笛隊に参加し、幾多の困難に面しながらも教会につながり続け、会長の手足となってコンゴ教会の発展に寄与した彼の人生は、コンゴ伝道における鼓笛活動の価値を体現したものではないだろうか。

